

別伝の研究

序言

三国志裴注や、世説新語の劉注などをみると、某別伝なるものが屢々引用されているが、それらによると、大体において、上は後漢時代から、下は東晋時代に至る人物に及んでいるようである。では、そのような別伝なるものは、一体どのようなものであり、何故に大体門閥社会と呼ばれる時代における人々について書かれているのであろうか。又、それらが三国志裴注等に数多く引用されていることに見られる如く、史書の欠を補うものとして重視されていたとすれば、その史料的価値はどのように考えればよいか等の、種々の疑問がわくが、不幸にして、今までにそれらについてこの説明はなされていないようである。

いま、全晋文(一六)「左思別伝」の条をみると、「嚴可均案。別法失矣。晋書所棄。其可節取者僅耳。……別伝道聽塗説。無足為憑。晋書彙十八家旧書。兼取小説。独棄別伝不采。斯史識也。」とみえている。嚴可均の考は、「別伝ば道聽塗説にすぎぬもので、現行晋書がこの別伝を採用しなかったのは一見識である」とするものであろう。即ち、少くともこの場合においては、別伝は単なる路巷の噂話にすぎず、とるに足らぬとされているわけである。然るに、三国志裴注等に多くの別伝が採用

矢野主税

されていることは、すべての別伝が必ずしもとるに足らぬとされていたと思えないことを示し、従って、すべての別伝を道聽塗説としてしりぞけるわけにはいくまい。では果して別伝とはどのようなものであったであろうか。

第一節、別伝の時代別と製作時期

先ず筆者は、どのような別伝が今日知られ、それがどの時代の人物の別伝があるかということが、更にもし可能ならば、それらがどの時代に製作されたかを推定してみよう。

〔表一〕三国志裴注所引(但し、人物の生存時代が両朝にまたがる時は後の王朝にかけた。)

別伝名	出典	人物の生存時代	別伝名	出典	人物の生存時代
曹瞞伝註	魏志(1)武帝紀	魏	孫資別伝	魏志(14)劉放伝	魏
吳質別伝	魏志(21)王 ^名 伝	魏	荀彧別伝	魏志(15)賈 ^名 伝	魏
華佗別伝	魏志(29)華佗伝	魏	孫 ^名 別伝	魏志(10)荀彧伝	魏
管輅別伝	魏志(29)管輅伝	魏	孫 ^名 別伝	吳志(6)孫 ^名 伝	西晋
虞翻別伝	吳志(12)虞翻伝	吳	荀彧別伝	魏志(10)荀彧伝	魏
司馬別伝	魏志(10)賈 ^名 伝	西晋	鄭玄別伝	魏志(4)高貴郷	後漢
曹志別伝	魏志(19)陳思王	西晋	趙雲別伝	蜀志(6)趙雲伝	蜀

(注)これが別伝なることについては、後述参照

〔表Ⅰ〕世説新語劉注引

潘岳別伝	魏志(21)	衛覬伝	西晋
潘尼別伝	魏志(21)	衛覬伝	西晋
費禕別伝	蜀志(14)	費禕伝	蜀
陸機・雲別伝	吳志(13)	陸抗伝	西晋
鄧原別伝	魏志(11)	鄧原伝	魏
劉廙別伝	魏志(21)	劉廙伝	魏
任愷別伝	魏志(27)	王昶伝	魏
王弼別伝	魏志(28)	鍾会伝	魏
程曉別伝	魏志(14)	程昱伝	魏
虞翻別伝	魏志(22)	盧毓伝	西晋
諸葛恪別伝	吳志(18)	諸葛恪	吳

別伝名	出典	人物の生存時代	別伝名	出典	人物の生存時代
王羲別伝	德行	西晋	(王) 弼別伝	文学	三国
(王) 丞相別伝	德行	東晋	王彪之別伝	方正	東晋
(王) 猷之別伝	德行	東晋	(王) 劭・薈別伝	雅量	東晋
(王) 恭別伝	德行	東晋	王彬別伝	識鑒	東晋
(衛) 玠別伝	言語、文学、識鑒、賞譽下、品藻、容止、傷逝	西晋	王澄別伝	賞譽下	東晋
(王) 含別伝	言語	東晋	王還別伝	賞譽下	東晋
王長史別伝	言語、賞譽下、傷逝、任誕	東晋	(王) 汝南別伝	賢媛	東晋
(王) 濛別伝	言語、賞譽下、品藻	東晋	(王) 雅別伝	讒險	東晋
王胡之別伝	言語、賞譽下、品藻	東晋	(郭) 泰別伝	德行政事黜免	後漢
(殷) 浩別伝	政事、文学	東晋	桓彝別伝	德行	東晋
(王) 敦別伝	文学	東晋	桓玄別伝	任誕、文学、德行	東晋
王述別伝	文学、方正	東晋	桓温別伝	言語、政事、文学、識鑒品藻	東晋
王廙別伝	仇讎	東晋			

(嵇) 康別伝	德行、容止棲逸	西晋	祖約別伝	雅量	東晋
阮光祿別伝	德行、棲逸	東晋	(謝) 鯤別伝	規箴、文学	西晋
(阮裕別伝)	德行、棲逸	東晋	(周) 処別伝	自新	西晋
向秀別伝	言語、文学	西晋	(蔡) 充別伝	輕詆	西晋
顧和別伝	言語	東晋	郝鑒別伝	德行	東晋
阮孚別伝	雅量、任誕	東晋	(郝) 超別伝	言語	東晋
賀循別伝	規箴	東晋	郝信別伝	品藻	東晋
(郭) 璞別伝	大学、術解	東晋	郝曇別伝	賢媛	東晋
高坐別伝	言語	東晋	(鄭) 玄別伝	文学	後漢
孔愉別伝	方正、棲逸	東晋	陶侃別伝	方正、識鑒賢媛	東晋
(管) 輅別伝	規箴、排調	三国	陳達別伝	品藻	東晋
桓沖別伝	夙惠	東晋	(東方) 朔別伝	規箴	前漢
(桓) 豁別伝	豪爽	東晋	(范) 宣別伝	德行	西晋
(賈) 充別伝	惑溺	西晋	范汪別伝	排調	東晋
司馬徽別伝	言語	三国	(伏) 澄別伝	言語	東晋
(鍾) 雅別伝	政事	東晋	鄧原別伝	賞譽上、輕詆	三国
(左) 思別伝	文学	西晋	卞壺別伝	賞譽下、任誕	東晋
(司馬) 無忌別伝	仇讎	東晋	(潘) 岳別伝	容止	西晋
孫放別伝	言語、排調	東晋	(孟) 嘉別伝	識鑒	東晋
(荀) 粲別伝	文学	三国	卞翼別伝	言語、豪爽	東晋
(謝) 玄別伝	文学	東晋	(羊) 曼別伝	雅量	東晋
(諸葛) 恢別伝	方正	東晋	劉尹別伝	德行、賞譽品藻	東晋
(周) 頴別伝	方正	東晋	(劉惔別伝)	德行、賞譽品藻	東晋
蔡司徒別伝	方正	東晋	(陸) 機別伝	言語、尤悔	西晋
			陸玩別伝	政事、規箴	東晋

〔表Ⅲ〕人物の時代別表

これらのうち、裴松之注所引別伝は、少くとも東晉時代或はそれ以前に成立していたものであろうし、世説新語注引の別伝は、少くとも梁時代に存在したことは明かである。ところが、裴注所引と世説新語注所引の別伝の中には重複するものも多し。例えば、潘岳別伝、管輅別伝、鄭玄別伝、陸機、陸雲別伝、邴原別伝等の如きである。すると、世説新語注引の別伝の中には、他にも東晉以前にできたものが多かったであろうと推測される。

そのことの一つの手掛りとなるものは、別伝の呼称である。別伝は、一般的には荀彧別伝とか、荀勗別伝とか、その氏名をかぶせた呼び方がされているが、時によると、王導の別伝を王丞相別伝といい、王濛別伝を王長史別伝といい、蔡謨の別伝を蔡司徒別伝といい、劉の別伝を劉尹別伝といっている如きがある。このように官職を以て人をよぶのは、宇都宮氏が指摘されたように（「（「近代社会経済史研究」第十二号世説新語の時代）」、その人物の生活していた時代をよ

く知っている人々の間に行われた呼び方で、それからみれば、

その前に、表Ⅲについて一言すれば、別伝人物の時代が、ほぼ後漢末から東晋に及ぶものであることは注目すべきであろう。このことは、これら別伝が、所謂門閥社会の形成、成立と何らかの意味で関係をもっていることを暗示するものである。しかし、それは裴注及び劉注にのみよった為ではないかとの疑問もである。そこで、いま別伝を非常に多く引用している太平御覧によってみるに、なるほど、劉向の如き前漢代の人物の別伝もみえる（例えば太平御覧 26768等所引）けれどもそれらは特殊の例の如くで、いま太平御覧にひく別伝を時代別に分類すれば次の如くである。

○前漢（数字は太平御覽卷數、代表的な卷數を一つあげた）
東方朔（2）、劉向（297）、劉根（710）、李陵（489）、
馬鈞（752）、計五
○後漢

何顥(444)、董卓(2)、郭泰(542)、鍾離意(34)、梁冀

(232) 馬融 (699) 李固 (265) 李燮 (252) 李邵 (332)
鄭玄 (157) 禰衡 (2) 盧植 (555) 趙岐 (558) 陳寔
(264) 樊英 (245) 張純 (241) 蔡琰 (432) 孔融 (385)

計 十八

○三国

揚彪 (691) 何晏 (380) 辺讓 (691) 顧譚 (389) 吳質
(378) 費禕 (345) 曹瞞 (137) 陸績 (264) 孟宗 (229)
岑佗 (360) 賈逵 (763) 婁承先 (180) 董正 (822) 曹植
(452) 曹操 (263) 司馬徽 (382) 曹肇 (386) 邴原 (385)
邴吉 (209) 王弼 (462) 任嘏 (221) 孫登 (392) 江綏
(511) 虞翻 (399) 許遜 (424) 潘勗 (403) 桓階 (221)
胡綜 (705) 管輅 (347) 管寧 (363) 趙雲 (376) 諸葛亮
(430) 諸葛恪 (378) 魏武 (431) 魏文帝 (693) 傅選
(322)

計 三十六

○西晋

杜蘭香 (769) 何禎 (385) 陸機 (12) 裴楷 (388) 曹攄
(12) 王祥 (496) 雷煥 (37) 向秀 (197) 周処 (417)
江祚 (262) 羊祐 (239) 許肅 (418) 衛玠 (209) 潘京
(688) 荀勗 (391) 傅宣 (385) 山濤 (409) 庾珉 (418)
夏統 (851) 趙至 (385) 蔡克 (816) 庾翼行 (824) 郭文
拳 (704) 張萃 (234)

計 二十四

○東晋

顧和 (263) 顔含 (219) 孟嘉 (265) 郭翻 (424) 王敦

237) 王蘊 (216) 王濛 (220) 王珉 (226) 王廙 (392)
謝安 (380) 羅含 (265) 孫放 (583) 許邁 (41) 陶侃 (708)
徐邈 (180) 杜祭酒 (157) 陳武 (363) 桓彝 (67) 桓
石秀 (255) 祖逖 (258) 葛仙公 (34) 殷浩 (248) 仏図澄
(64)

計 二十三

○外国

石虎 (34) 石勒 (338)

計 二

○不明

車浚 (921) 馬明生 (577) 王威 (922) 孫略 (707) 許達
(373) 徐延年 (816) 桓任 (701) 魯女生 (394)

計 八

これによれば、表Ⅲによってたしかめた傾向はほぼ間違いないことが明かである。従って、別伝を有する人物の生存時代は東晋以前であって、それ以後は殆どなかったと推定しても誤りはあるまい。では、この各時代に亘る別伝はどのようにして作られたものであろうか。それは又、作られた時期を考えることもなろう。

さて、魏晋時代においては、一家の伝記たる家伝・家記や、一族の系譜たる氏譜の如きが盛んに作製されたことは、既に筆者が指摘したところである（「六朝門閥の社会的政治的考察」(長大史学第六輯)）。ところが、この時代には、個人の伝記の作製も盛んであったと思われる。例えば魏志(10)荀彧伝裴注によれば、「何劭為(荀)彧伝曰。彧字奉倩。彧諸兄並以儒術

論議。而祭独好言道。」云々とみえ、或は呉志(7)顧雍伝譚の条の裴注によれば、「陸機為(顧)譚伝曰。宣太子正位東宮天子方隆訓導之義。妙簡俊秀。講学左右。」云々とみえ、更に魏志(21)王粲伝裴注によれば、「嵇喜為(嵇)康伝曰。家世儒学。少有雋才。曠邁不羣。」云々とみえ、或は又、世説新語(第2篇)劉注によれば、「(顧)愷之為父伝曰。君以直道陵遲於世。入見王。王髮無二毛。而君已斑白。」云々とみえている。

或は更に、魏志(1)武帝紀裴注には、曹瞞伝なるものを多く引くが、それについて裴注には、「呉人作曹瞞伝及郭頒世語並云。嵩夏侯之子。」云々とみえていて、曹瞞伝は呉人の作という。ところでこの曹瞞伝は誰の伝かというに、それは武帝即ち曹操のものである。というのは、魏志(1)武帝紀の裴注によれば、「太祖一名吉利、小字阿瞞。」とみえるのみであるが太平御覧(93)魏太祖武皇帝の条によれば、「姓曹名操字孟德。漢相国曹参之後。」曹瞞伝曰。太祖一名吉利。字阿瞞。」とあるので、元来この注は、曹瞞伝の引用であつたらしく、従つて阿瞞の瞞をとつて曹瞞伝としたものであらう。とすると、曹操の伝を呉人のある者が作つたということにならう。

更に又、魏志(28)鍾会伝の裴注によれば、「会为其母伝曰。夫人張氏字昌蒲。太原涑氏人。太傅定陵成侯之命婦也。」云々とみえ、同じく魏志(25)辛毗伝の裴注には「(辛)毗女憲英適太常泰山羊耽。外孫夏侯湛為其伝曰。憲英聡明有才鑒。」云々とみえる。

これらは魏から晋にかけての頃に、自分の一門或は親しき人々の為に、その人の伝を作る風習が広く行われていたことを証

するものであらう。勿論、呉人作曹瞞伝は必ずしもそうとはいえず、呉人側からみて魏の曹操の人物を評したものであらうか。というのは、例えば魏志(1)武帝紀の建安廿五年の条の裴注引曹瞞伝に、「然持法峻刻。諸将有計画勝出己者。随以法誅之。及故人旧怨。亦皆無余。」という如き、曹操の酷薄の性格を痛烈に指摘する如きをみれば、あまり好意ある人物伝とも思われぬからである。

しかし、何れにしても、そのような個人の伝をつくる風習は広く行われていたこと明かである。それらの伝記は恐らくは一応その死後に作られたと思われるが(後述参照)、では、それらは一体何と呼ばれていたのであらうか。

ところで、太平御覧(406)には袁宏山濤別伝なるものがみえ、同書(750)には又、曹毗杜蘭香別伝なるものがみえる。

この袁宏山濤別伝は、袁宏と山濤の二人の別伝ではなく、袁宏作の山濤別伝と考うべきである。というのは、袁宏はいうまでもなく東晋の人(晋書92)であつて、西晋初頭の山濤(晋書43)とは時代的に異なるし、又山濤とは何等姻戚関係の如きもなく、彼と山濤とを併せて伝をつくる如きことは考えられない。然るに、袁宏は、晋書文苑伝にのせられる如き、「文章絶美」(袁宏伝92)の人物であるから、山濤の伝をつくつたことは考えられよう。すると、同じく晋書文苑伝にのせられている曹毗(晋書92)も亦、杜蘭香別伝なる伝記をつくつたと考えてよからう。

このように、ある人物が他人の伝記をつくつた場合、別伝と呼ばれるものもあつたわけであるが、そのような伝記がすべて別伝と呼ばれたか否かは明かでない。従つて、筆者はいま、上

述の如き、他人によって作られた伝記と、その伝えられた人物名のつく別伝とを比較することによって、果してどのようなものが別伝と呼ばれたのかを明かにしてみようと思う。

いま何劭が作った荀彧伝の内容と、荀彧別伝として世説新語(文学)劉注に引用されているものを比較してみるに、世説新語注には、

「彧別伝曰。彧字奉倩。潁川潁陰人也。太尉彧之少子也。彧諸兄儒術論議。各知名。彧能言玄遠。常以子貢稱夫子之言。性与天道。不可得而聞也。然則六籍雖存。固聖人之糠粃。能言者不能屈。」と見え、更に、

「彧太和初到京邑。輿傳嘏談。善名理。而彧尚玄遠。宗致雖同。倉卒時或格而不相得意。裴徽通彼我之懷。為二家釈。頃之彧与嘏善。」とみえている。ところが前引荀彧伝の裴注に引用する「何劭為彧伝曰」には、

「彧字奉倩。彧諸兄並以儒術論議。而彧独好言道。常以為子貢稱夫子之言。性与天道不可得聞。然則六籍雖存。因聖人之糠粃。彧兄侯難曰。易亦云。聖人立象。以盡意繫辭焉。以盡言微言。胡為不可得而聞見哉。彧答曰。蓋理之微者。非物象之所譽也。……及當時能言者不能屈也。……太和初到京邑。与傳嘏談。嘏善名理。而彧尚玄遠。宗致雖同。倉卒時或有格而不相得意。裴徽通彼我之懷。為二家騎駢。頃之。彧与嘏善。夏侯玄亦親。常謂嘏玄曰。子等在世塗間。功名必勝我。但識劣我耳。……(下略)。」とみえる。

この両者を比較するに、多少の出入はあるものの、全く同一系統に属するものであることは間違いない。ただ世説新語注引

用の荀彧別伝には、「太尉彧少子也。……各知名」という如き、単なる説明的記事を附加している反面、「聖人之糠粃」と「能言者不能屈」との間にある記事を省略した為に、「能言者不能屈」の内容が明かでない。これ明かに、後者の記事を略述したものとしてよからう。更に、世説注別伝に、「彧太和初到京邑。与傳嘏談。善名理。」というのの意味が明かでないが、元来は裴注引何劭作の荀彧伝の如く、「嘏善名理」とあったものであろう。嘏の字が入って始めて文意は明かである。更に、「二家釈」というものは、元来「二家騎駢」とあったものを、意を以て記したものと考えられる。世説新語(文学)の本文よれば、この後半について、「傳嘏善言虚勝。荀彧談尚玄遠。每至共語。有争而不相喻。裴冀州釈二家之義。通彼我之懷。常使両情皆得。」と述べているが、劉義慶が世説新語を編纂した宋の頃には、既にこのように変形して伝えられていたものであろう。これと荀彧別伝とを比べれば、別伝はよく何劭作彧伝を伝えているといわねばならず、この両者は同一物であるか、少くとも内容的にも時代的にも同一系統の非常に近い関係にある記事といわねばなるまい。

では、呉人作曹瞞伝においてはどうかであろうか。いま太平御覧をみるに、曹瞞伝として引用せる記事と、曹瞞別伝として引用せる記事とがある。まず、これらの中、曹瞞別伝なるものが、魏志(一)武帝紀その他に引く曹瞞伝とどのような関係にあるかを比較してみよう。太平御覧引用のものは、()内は卷数を示す)

(1)曹瞞別伝曰。公遣牽攸。勒兵入宮收后。后閉戸匿壁中。攸壞戸

廢壁。牽后出。(137)

(2) 曹瞞別伝曰。操遨遊無度。其叔数其父。操後行逢叔於道。

陽敗面為口云。中暴風。叔告其父。父呼見之。操面如故。從此叔言不得入信。操益得縱恣。(367)

(3) 曹瞞別伝曰。太祖為人佻易無威儀。每與人談論。戲弄言確。⁽³⁶⁸⁾盡無所隱。及歆悦大笑。至以頭投諸案中。肴膳皆沾汚巾幘。

(371)

(4) 曹瞞別伝曰。沛国桓邵亦輕太祖。邵避難交州。得出首拜謝於庭中。太祖曰。跪可解死耶。遂殺之。(342)

(5) 曹瞞別伝曰。太祖常行經麦中。令士卒犯麦者死。騎士皆下馬。持麦以相付。太祖馬騰入麦中。主簿対以春秋之義。罰不加於尊。太祖曰。制法而自犯之。何以率下。然孤為軍師。不可殺。請自刑。因拔劍。割髮以置地。(349)

(6) 曹瞞別伝曰。王自漢中至洛陽。起建始殿。使工蘇黃越徒美梨。掘之。根尽血出。越以狀聞。王躬自視之。以為不祥。遂寢疾。(366)

という如くであるが、これらは皆、魏志(1)武帝紀にひく曹瞞伝と殆ど同一である。例えば(1)は、魏志(1)建安十九年の条裴注にみえるもので、「曹瞞伝曰。公遣羣歌。勒兵入宮收后。后閉戸匿壁中。歌壞戸發壁。牽后出。」云々とみえていゝる。これによれば「廢」と「發」の違いというような筆写の誤と思われるものはあつても、全く同文といってさしつかえあるまい。(2)は、魏志(1)冒頭の、「太祖少機警。有權数而任俠放蕩。不治行業。故世人未之奇也。」という本文に注した曹瞞伝と殆ど同意であるが、いまそれを引用してみるに、

「曹瞞伝云。太祖少好飛鷹走狗。游蕩無度。其叔父数言之於嵩。太祖患之。後逢叔父於路。乃陽敗面喙口、叔父怪而問其故。太祖曰。卒中惡風。叔父以告嵩。嵩驚愕呼太祖。太祖口貌如故。嵩問曰。叔父言汝中風。已差乎。太祖曰。初不中風。但失愛於叔父。故罔耳。嵩及疑焉。自後叔父有以告。嵩終不復信。太祖於是益得肆意矣。」とみえる。即ち、(2)の太平御覽引用のものは、魏志裴注引の記事の省略引用にすぎないかと考えられる。更に、(3)(4)(5)(6)は、魏志(1)建安廿五年の条裴注引曹瞞伝と同様であるが、何れも省略引用であること(2)の場合と同様であり、従つて、何れも文意の徹底しないうらみがある。しかし、今は煩雜にすぎるので省略に従いたい。

このようにみてくれば、太平御覽引の曹瞞別伝と、魏志(1)所引の曹瞞伝は全く同じものではないのかと考えられる。しかし、既にみた如く、その記述に多少の相違が見られるのは、全く同じものというのではなくて、同一系統の記事にすぎないのではないかともいえるよう。そこで問題になるのは、曹瞞別伝が太平御覽に引用される時、そのまま引用されたものか、或は可なりの省略が行われながら引用されたものであるかということであろう。若し、そつくりそのまま引用されたものであるならば、両者は同一系統の記事であらうということしか考えられないが、省略して記述されることありとすれば、両者は同一物をみてもさしつかえなからう。短文とはいへ、全く合致する(1)の如きがあるからである。

ところで、太平御覽の引用文は往々にして省略脱誤があることは周知のことでもあるが、いまその一例を示せば、太平御覽

(465) にひく呉志に曰く、「薛綜字仲文沛郡人也。其先田文封薛。因以氏焉。避地交州。士燮召為交趾太守。及還都。蜀使張奉於(孫)權前嘲尚書闕沢。沢不能答。綜曰有犬為獨。無犬為蜀。横目狗身虫入其腹。奉曰。不当復別吳耶。綜応声曰。無口為天。有口為吳。君臨万邦。天子之都。奉無以対焉。」と。ところが、これを呉志(9) 薛綜伝についてみるに、「薛綜字敬文、沛郡竹邑人也。少依族人避地交州。……士燮既附孫權。召綜……除合浦交趾太守。……事畢還都。守謁者僕射。西使張奉。於權前。列尚書闕沢姓名。以嘲沢。沢不能答。綜下行酒。因勸酒曰。蜀者何也。有犬為獨。無犬為蜀人。横目苟身。虫入其腹。奉曰。不当復列君吳耶。綜応声曰。無口為天。有口為吳。君臨万邦。天子之都。於是衆坐喜笑。而奉無以対。」とみえている。この両者を比較すれば、御覧が勝手に原文を省略し、更には附加していること明かである。薛綜の出自の如きは、呉志本文にはなく、そこに引く裴注にあるものである。勿論この条は、太平御覧人事部弁の條にあるものであるから、御覧は薛綜の弁舌を中心にして書いたであろうとは考えられるが、その弁舌を示すにしても、何故このような問答が行われたかという理由、即ち呉志にみる、張奉が闕沢の姓名を嘲ったことを省略している。従って御覧の記事をよめば、「有犬為獨。無犬為蜀。」の語がいかに唐突にきこえる。このようにみれば、原文に忠実でない太平御覧の引用の仕方は一目瞭然であろう。このように考えた場合、前述(2)にみた如き省略は太平御覧としてはいつでもあり得たことであろうし、又(1)にみる如き一致も亦あったとすれば、所謂曹瞞別伝なるものは、同一物とみてよいので

はなかるうか。更に太平御覧には、曹瞞伝も引用せられていることを述べたが、これは全く魏志(1) 武帝紀等に引くものと同じのものであることは、太平御覧(93) 魏太祖武皇帝の条に引く曹瞞伝が、前述魏志(1) 冒頭にひく曹瞞伝としてあげた記事と一、二の文字の出入はあれ、殆ど同文であることによつて証明される。若し以上の如く考えうるとすれば、太平御覧に引く曹瞞別伝、曹瞞伝、魏志(1) 武帝紀等にひく曹瞞伝は同一のものであるといえそうである。

ところが、太平御覧によれば、更に曹操別伝なるものも見える。一体これは曹瞞伝とどのような関係にあるものであろうか。いま、太平御覧にみる曹操別伝なるものを引用すれば

①曹操別伝曰。武皇帝為兗州。以畢諶為別駕。兗州乱。張孟卓劫諶母弟。帝見諶曰。孤綏撫失和。聞卿母弟為張邈所執。人情不相遠。卿可去。孤自遣不為相棄。諶涕泣曰。当以死自効。帝亦垂涕答之。諶明日便走。後破下邳。得諶還。以為掾。(525)

②曹操別伝曰。曹操典軍都尉。還譙。沛士卒共叛。襲擊之。操得脱身亡走。竄平河亭長舍。称曹濟南処士。臥養足創八九日。謂亭長曰。曹濟南雖敗。存亡未可知。公幸能以車中相送。往還四五日。吾厚報公。亭長乃以車中送操。未至譙。数十里。騎求操者多。操開帷示之。皆大喜。始寤是操。(467)

③曹操別伝曰。呂布梟勇。且有駿馬。時人為之語曰。人中有呂布。馬中有赤兔。(391)

④曹操別伝曰。操破梁孝王棺收金宝。天子聞之哀泣。(551)

⑤曹操別伝曰。操引兵入峴。發梁孝王冢。破棺收金宝数万斤。

天子聞之立泣。(811)

⑥曹操別伝曰。始袁忠為沛相。薄待操。沛国桓劭亦輕之。及在兗州。陳留辺讓頗笑操。操殺讓。族其家。忠、劭俱避交州。操遠使。就太守士燮尽族劭。劭得出首拜謝於中庭。操謂曰。跪可解死耶。遂殺之。(647)

とみえている。さて、ここに引いた⑥は、前引太平御覽(65)所引の曹瞞別伝と同一内容の記事であること間違いない。いま、⑥の全文について、魏志(1)建安二十五年の条引曹瞞伝と比較してみるに、曹瞞伝には、

初袁忠為沛相。嘗以法治太祖。沛国桓邵亦輕之。及在兗州。陳留辺讓言議頗侵太祖。太祖殺讓族其家。忠、邵避難交州。

太祖遣使。就太守士燮尽族之。桓邵得出首拜謝於庭中。太祖謂曰。跪可解死耶。遂殺之。」と

みえる。これらを比較すれば、なるほど内容は同様であり、殆ど異同はないかの如くにも見えるが、実は太平御覽によくみる、単なる表現、内容の省略、文字の変更等の如きではないところの、考慮すべき相違点が見出せる。例えば、袁忠が「以法治太祖」と曹瞞伝にあるものが、「薄待操」とあり、「頗以言議侵太祖」とあるものが、単に、「頗笑」とある如きである。

即ち、曹瞞伝の記述が具体的であるのに対して、曹操別伝は抽象的な表現で片づけているのである。これは単なる省略や文字の変更ではない。勿論上述の具体的記述が抽象的記述になったのは、原文から太平御覽に引用される時におこったのではないかと考えられぬこともない。それは太平御覽の原文引用の仕方について上述したところからも想像される。けれども、太平御

覽は、既にみた如く、原文の省略引用、文字の変更、時には注を文の如く引用する等のことはあっても、内容そのものを変えたとは考えられぬ。従って、この曹瞞伝と曹操別伝とは元来別のものであったであろう。勿論、その内容からみて、これらが同一系統のものであることは疑いがないから、曹操別伝は曹瞞伝を資料として、後に編纂し直されたものと考えねばなるまい。

更に、太平御覽(801)によれば、「曹瞞伝曰。呂布有駿馬。名赤兎。常騎乘之。時人為之語曰。人中有呂布。馬中有赤。」とみえるが、これ前掲③と同一内容である。これだけの記事では、同一系統の両者の、何れが古く、何れが新しい記述であるかを推定することは困難であるが、曹瞞伝の方が一読して筋の通った書き方のように思われる。③の方は、梟勇と駿馬とを対語として記しながら、赤兎の説明がない為に、文章そのものは曹瞞伝に比すればなかなかこっているのに、どうも文意が通らない憾がある。いま、魏志(7)呂布伝をみるに、「布有良馬。曰赤兎。」「曹瞞伝曰。時人語曰。人中有呂布。馬中有赤兎。」とあるのによれば、良馬は赤兎という名であったという説明が、陳寿のよった原史料にはあったと考えられる。こうみてくれば、曹瞞伝こそ原史料或はそれに近いものであり、③の曹操別伝の方は、そのこった書き方や、それにもかかわらず文意の通らない書き方からみて、曹瞞伝を資料として書き改められたものと考えることができよう。

不幸にして、①②④⑤については、対応すべき曹瞞伝を見出し得ないが、以上の考察にして認められるならば、曹瞞別伝と曹操別伝とは異ったものであり、而も曹操別伝は曹瞞伝に基

ずいて作られたものと推定してよからう。

以上荀粲別伝の場合と、曹瞞伝の場合とを考え合せれば、荀粲別伝の場合も亦曹瞞伝、曹瞞別伝の場合と同様、何劭作の荀粲の伝と荀粲別伝なるものとは同一物とみてよいのではなからうか。

さて、この考を更にたしかめる為に、魏志(28)鍾会伝裴注にひく、「何劭為其(王弼)伝曰」とあるものと、太平御覽にひく王弼別伝を比較してみよう。御覽によれば、

○王弼別伝曰。弼年十余歳。好老莊。通弁能言者。(464)

○王弼別伝曰。弼性和理。樂遊宴。解音律。善投壺。(753)

とあるが、何劭作の王弼の伝は、次のようにいつている。「弼幼而察惠。年十余。好老氏。通弁能言。……性和理。樂游宴。解音律。善投壺。」と。この両者の相異は、単に文字の異同、例えば「老氏」と「老莊」、「能言」と「能言者」、「十餘歳」と「十餘」の如き違にすぎない。而もそのような文字の変更に御覽引文ではいつものことである。ただ文章そのものが短いので、断定は仲々むずかしいとは考えられるが、殆ど両者は同一のものと見て差つかえないであろう。このように考えれば、上述した何劭による荀粲伝、呉人による曹瞞伝など、他人の作った伝記は、それぞれの人名を附した別伝という形で伝えられていったといえるであろう。

では、このような他人による個人の伝記はすべて別伝と呼ばれていたであろうか。ところが必ずしもそうではなかったようである。

先述の如く嵇喜は弟康の伝記をつくっている。ところが世説

新語劉注には多くの嵇康別伝を引いているので、その一つを引用するに、「康別伝曰。康性含垢藏瑕。愛惡不爭於懷。喜怒不寄於顔。所知王濬冲在襄城。面數百。未嘗見其疾声。朱顔此亦方中之美範。人倫之勝等也」(徳行第一)とあり、他に容止(14)棲逸(18)の条にも見える。ところが魏志(21)王粲伝裴注にひく、「喜為康伝曰」の条には、これらと内容を同じくする記事は全く見えない。而も同伝の裴注には、「喜為康伝曰」と共に、同一箇所において、「康別伝」なるものを引用している。即ち同一ヶ所の注に、別々に注記してあるからには、これらは別物であることは明かであり、従って、太平御覽引の「康別伝」の記事に「喜為康伝曰」と同一内容のものがみえないのは当然といえよう。

更に、魏志(29)管輅伝によるに、裴注に多くの管輅別伝を引用している。然るに同伝裴注によれば、「臣松之案。辰(輅の弟)所稱鄉里太常者。謂劉寔也。辰撰輅伝。實時為太常。」とみえ、宛もこの弟辰作の輅伝が管輅別伝であるかの如き感を与える。錢大昕はそれ故にか、これを以て管輅別伝は弟辰の作となしている(二十二史劄記卷15裴松之注上虞伯生傳無遺逸の条)。なるほど、同伝裴注をみるに「弟辰叙曰」として輅についての記事を引用している。従って弟辰が輅の伝をつくったことは事実であるにしても、それが輅別伝であるかどうかは明かでない。それどころか、寧ろ、裴松之が多くの輅別伝を引用しながら、而も別に、「弟辰叙曰」として書いているのは、この別伝が辰の作った輅の伝とは異ったものであることを示すものといえよう。

更に、同様な例についてみるに、先述の如く鍾会是母の伝を

つくったが、太平御覽(220)にひく、「鍾会母伝曰。嘉平元年車駕朝高平陵。会為中書郎從行。宣王始舉兵。衆人恐懼。而夫人自若。」とみえるものは正にそれに当るであろう。そのことは、魏志(28)鍾会伝裴注に、「其母伝曰。……嘉平元年車駕朝高平陵。会為中書郎從行。相国宣文侯始舉兵。衆人恐懼。而夫人自若。」とみえるところと御覽引の文を比較するに、僅かに御覽が省略に従ったところがあるだけで、全く同文であることよって確かめることができる。従って、この鍾会の母の伝は鍾会母伝として後世に伝わったもので、別伝とは呼ばれなかったものに違いない。

更に時代が降って東晋代の例についてみるに、陶潜による「晋故征西大将军長史孟府君伝」(全晋文二)なるものがみえる。これは孟嘉の伝であるが、孟嘉には別伝もあって世説新語議(第七)の劉注にみえる。いま、孟嘉別伝の一部を引用してみるに、
○嘉別伝曰。嘉字萬年。江夏鄆人。曾祖父宗、吳可空。祖父揖。晋廬陵太守。宗葬武昌陽新縣。子孫家焉。嘉少以情操知名。太尉庾亮領江州。辟嘉部廬陵從事。下都還。亮引問風俗得失。云々」とみえるが、これに対し孟府君伝の方には、

○君諱嘉字萬年。江夏鄆人也。曾祖父宗。以孝行稱。仕吳司馬。祖父揖。元康中為廬陵太守。宗葬武昌新陽縣。子孫家焉。遂為縣人也。君少失父。奉母二弟居。娶大司馬長沙桓公陶侃第十女。閨門孝友。無能間。鄉閭稱之。冲默有遠量。弱冠儔類咸敬之。云々」としている。この両者は一見して異った記事であること明かである。即ち、本貫も現住所も異っているし、曾祖父宗の呉における官職も異っている。晋書(98)の

孟嘉伝によれば本貫は別伝に等しく、晋書(15)地理志によれば鄆県は江夏ではなく武昌に属し、又新陽は陽新の錯誤と考えられる。今は、それらの正誤は問わないとしても、この両伝が全く異った記録であることに異存はあるまい。

以上の如くみてくれば、個人の伝記が作られた場合、それらの中に別伝と呼ばれたものと、そうでない場合とがあったこと明かである。では、どのような場合に別伝と呼ばれ或は呼ばれなかったかというに、兄弟、或は母子の如き一家或は一門の如き関係の人々による伝記作製では、別伝と呼ばれることはあまりなかったのではないか、嵇喜による康伝、管辰による輅伝、鍾会による母伝などはそれを示している。従って、前述した夏侯湛による外祖母憲英伝、或は顧愷之による父伝の如きも別伝とはいわれなかったであろう。これに対して、「博学善属文。陳説近代事。若諸指掌。」(何遜伝33)といわれた何劭によって王弼や荀粲の別伝が作られ、「竹林名士伝三卷」(晋書92)をついた文学の士袁宏によって山濤別伝が作られ、同じく文章の士曹毗(曹毗別伝92)によって、神女杜蘭香別伝が作られたとすれば、別伝は、むしろ伝をつくられる人物とは直接的関係の少ない人々によって作られることが多かったのではあるまいか。孟嘉別伝について、晋書斟注(94)孟陋伝の注に孟嘉別伝をひいて「(嘉)別伝不知誰作。」と評している如く、一般的には、別伝の作者が不明であるということも、このことを示すものの如くである。従って、先引陶潜の故征西大将军長史孟府君伝の如き、作者のはっきりした伝や碑銘にみる伝の如きではなかったであろう。そのことは、例えば、文選(38)「為范始興作求立太宰碑

表」所引李善注に、「陳寔別伝曰。寔卒。蔡邕爲立碑。刻銘。」
という如く、碑銘は蔡邕が作ったこと明かであるのに、別伝の
方は誰の作が明かではないことにみる如きではなかったであろ
うか。

では、別伝は何時ごろ作られたものであろうか。いまここに引いた陳寔別伝についてみるも、寔別伝はその死後作られたこと明かであるが、恐らく一般にその人物の死後遠からずして作られたものではなからうか。いま、作者のはっきりした別伝について考えてみるに、何劭は荀彧別伝、王弼別伝をつくったわけであるが、何劭は西晋武帝と同年といわれ（晉書33何劭伝）従つて魏末の生活は十分知っていたわけである。これに對し伝せられた方の荀彧は、魏末に若年二十九才にして死んでおり（魏志10何進傳引何劭の條）王弼は同じく魏末の人、正始十年即ち嘉平元年に若くして死んでいる（魏志28鍾會伝引「何劭為其友」の條）。この二つの別伝は共にその死後のものであることは、弼について「時年二十四。無子絶嗣。弼之卒也。晋景王聞之。嗟歎。者累日。其為高識所惜如此。」（魏志28少會伝引何劭為其友の條）

というところで明かであり、又、荀彧についても、「歳餘亦亡。時年二十九。彧簡貴。不能常人交接。所交皆一時俊傑。至葬夕赴者。裁十余人。皆同時知名士也。」（魏志^{〔10〕}荀彧^{〔11〕}伝）とあるところで明かである。然るに何劭は武帝と同年であるから（晉書^{〔12〕}何劭^{〔13〕}伝）、王弼の卒した嘉平元年には二十才前後と考えられるので、廿四才で死んだ王弼と殆ど同年輩であつたといつてよい。荀彧はいつ死んだかは明かでないが、彧のすぐ兄である顓が泰始十年（A.D.274）に死んでいることからみて（晉書^{〔14〕}顓^{〔15〕}伝）、魏末の人であることは間違いない。従つて、この二人の伝は、個人的

とずいて編纂したものと、相当後世の人が、間接的資料にもとずいて編纂したものである。

第二節 別伝の内容と史料的价值

別伝が、以上の如く、時には同時代の人により、時には可なり後世の人によって作られたとした場合、その史料的价值については疑問のある場合もありそうであるし、而も、一般的にいつて、別伝の筆者が明かにされていないことは、その史料的价值を認める上に躊躇を感じしめないわけではない。

では、それら別伝を史料として考える場合、それらの内容はどうのようなもので、その価値をどう評価すればよいであろうか。次に、二、三の具体例について検討してみたい。

○曹瞞伝（曹瞞別伝）の場合

前述した如く、魏志（1）武帝紀には多くの曹瞞伝を引用しているの、先ずその検討から始めたい。

別伝はやはり一つの個人中心の伝記であった。例えば、魏志（1）武帝紀の初頭に、「姓曹諱操字孟徳。漢丞相之後。」とあるのに注して、「曹瞞伝曰、太祖一名吉利。字阿瞞也。」（太平御覧93魏志武帝の条）とみえ、つづいて操の父嵩について、「莫能審其生出本末。」とある本文に対して、「呉人作曹瞞伝及郭頒世語並云。嵩夏侯氏之子。夏侯惇之叔父。太祖於惇為従父兄弟。」（魏志（1）武帝紀）との裴注がある。ところが裴注は、曹氏の遠い祖先については、王沈魏書を引用し、操の祖父及父嵩については、司馬彪続漢書を引いて説明を加えているのをみれば、別伝はその個人の伝記を中心として書かれたもので、祖先について書かれたとしても、恐らく、祖父、父ぐらいのことにすぎなかったであろう。

う。

或は又、子について記した場合もあることは、太平御覧（2）侍中の条に、「顔含別伝曰。（含子）顔髦字君道。儀狀嚴整。風貌端美。大司馬桓公歎曰。顔侍中廊廟之望。喉舌機要。」とあり、又同書（25）左右衛將軍の条に、「王敦別伝曰。敦子応字安期。官至武衛將軍。」とみえるなどである。けれども、やはり記述の中心は本人に関するものであったであろう。

さて、今日知られている曹瞞伝の場合も殆ど曹操個人についての記録であるが、その中で注目すべきは、曹操の性格を特徴づけるような逸話の引用が極めて多いことである。既に引用した曹瞞伝をみても、例えば、曹操が叔父をあざむいた話、或は輕桃の振舞のあった話、桓郗を虐殺した話、或は彼の馬が麦を喰った時の話の如きがみえた。

更に魏志（1）建安廿五年の条裴注にひく曹瞞伝には、曹操の權謀術数ぶりを描いて、

「常討賊廩穀不足。私謂主者曰如何。主者曰。可以小斛以足之。太祖曰善。後軍中言太祖欺衆。太祖謂主者曰。特当借君死以厭衆。不然事不解。乃斬之。取首題徇曰。行小斛盜官穀斬之軍門。其誣虐變詐。皆此之類也。」とみえるし、或はその行軍の殘虐を描いて、魏志（10）荀彧伝裴注引曹瞞伝には、「自京師遭董卓之乱。人民流移東出。多依彭城間。遇太祖至。坑殺男女数万口於泗水。水為不流。…太祖不得進。引軍從泗南攻。取慮、睢陵、夏丘諸県。皆屠之。雞犬亦尽。墟邑無復行人。」とも見えている。

勿論このような逸話的な内容ばかりではなく、魏志(1)武

帝紀の、「年二十。挙孝廉為郎。除洛陽北都尉。遷頓丘会。」に注した曹瞞伝は、太祖が厳正な政治をなし、権豪をさげず、職責を完うしたことを述べ、「於是共称薦之。故遷頓丘会。」とあって、本紀にはない史料として、彼が頓丘令に昇進した理由を説明している。勿論、この権豪を抑えたことも逸話といえまいが、何れにしても、このような本紀の補充史料としての役割を果たした曹瞞伝をみることが出来る。しかし、これらの例は、例えば、魏志(1)武帝紀建安二十五年度の条裴注引の魏書に、「其余。拔出細微。登為牧守者。不可勝数。是以翦造大業。文武並施。御軍三十余年。手不捨書。昼則講武策。夜則思經伝。登高必賦。及造新詩。被之管絃。皆成樂章。……性節儉。不好華麗。後宮衣不錦繡。侍御履不二采。云々。」とのべて、曹操を文武兼備にして而も優雅節儉の人物として極めて美化しているのに比べれば、大きな相違であろう。少くとも、曹瞞伝にみる限りでは、本人中心の伝記であり、従ってその政治的活動も可なり記されており、それによって史書の欠を補いうる点もあったが、主としては、逸話的な記事によってその人物の為人を描く如き内容であったと思われる。而もこの場合は、前引魏書の如き美化とは反対に、曹操の酷虐変詐を暴露するという手法がとられていることが注目される。この曹瞞伝は「呉人作」と伝えられるが、この呉人というのは、単に江南出身の人ともとれるが、同伝の暴露的手法からみて、三国の呉の人という意味ではなからうか。

では、他の人々の場合、その内容はやはり個人逸話的なもの

にすぎなかったであろうか。

いま、荀彧別伝を例にとって考えてみよう。魏志(10)荀彧伝によれば、「(建安)八年太祖録彧前後功。表封彧萬歲亭侯。」とあるが、それに注した荀彧別伝には、「彧別伝載太祖表曰。臣聞。慮為功首。謀為賞本。野績不越廟堂。戰多不踰國勲。……天下之定。彧之功也。宜享高爵。以彰元勲。彧固辞無野戰之勞。不通太祖之表。太祖与彧書曰。……功未必皆野戰也。願君勿讓。彧乃受。」とみえて、時に漢の侍中、守尚書令たりし荀彧の功を表した太祖の上表、太祖が彧に与えた書の如き、他には見られない史料があげられており、或は又、同伝建安十二年の条の、「復增彧邑千戸。合二千戸。」に対してひく裴注の或別伝にも、太祖の表をのせている。更に同伝には、彧の薨後に注する或別伝に、「彧別伝曰。彧自為尚書令。常以書陳事。臨薨皆焚毀之。故奇策密謀。不得尽聞也。是時。征役草創。制度多所興復。……彧從容与太祖論治道。如此之類甚衆。太祖常嘉納之。……前後所举者。命世大才。邦邑則荀攸、鍾繇、陳羣。海内則司馬宣王。及引致当世知名。邴慮、辛歆、王朗、荀悦、杜襲、辛毗、趙儼之儔。終為卿相以十数。」云々とみえて、他の史書に見えぬ史料を提供している。

これらは、別伝なるものが、単なる逸話的なものばかりでなく、極めて政治的な内容を含み且つ、荀彧の死後、遠からざる時期に編纂されたものであることを思わせると共に、荀彧の身近に残っていた資料を充分利用しうる人によって作られたことを推定せしめ、従って、その史料的价值の高さを認めざるを得ざらしめるものといえよう。更に、その書法からみて、荀彧に

好意的な人物が、彼の功績を残そうとして編纂したものであることもほぼ誤りあるまい。

このような例は、呉志(12) 虞翻伝の裴注に、「翻別伝曰。

(孫) 權即尊号。翻因上書曰。云々。」として、翻別伝に彼の上表文をのせているが如き、或は蜀志(6) 趙雲伝裴注にひく雲別伝に、「雲別伝載後主詔曰。云々。」とあって、蜀の後主が雲の死後賜った詔をのせているが如きにも見られるのであって、これらは共に、一般史書の欠を補う貴重な史料といわねばなるまい。その他、史書の欠を補うという意味では、例えば魏志(21) 劉廙伝の、「黄初二年卒。」とあるのに注した廙別伝には、「廙別伝云。時年四十三。」とあるが如き、或は魏志(14) 程昱伝に、昱の孫曉について、「曉別伝曰。曉大著文章。多亡失。今之存者。不能十分之一。」とあるが如きものも見える。以上によれば、別伝は必ずしも逸話的な内容のみならず、公文書乃至はそれに準ずる文書を収めることもあり、他にも種々史書の欠を補うものがあつたといえるし、従つて、その史料的价值は極めて高く評価せられて然るべきものがあつたといわねばならぬ。

このようにみてくれば、別伝には逸話的なものが多い場合もあつたが、或は又政治的な根本資料に遡つて書かれたものもあつたといえるようである。しかし、曹瞞伝の場合は、呉人の作であつたということが種々の意味でこの別伝を逸話的なものにしたのかも知れないし、或は又、曹操の人物が事実権謀にたけた人物であつたが故に自ら逸話的な記述が主となつたということもあるう。けれども、その他の別伝についてみたところによ

つて、明かな如く、別伝の史料的价值は、高く評価されてよいといえるのではなからうか。

次に、西晋の人物についての例として、衛玠の場合をみるとしよう。いま、衛玠別伝を引用してみるに、

① 玠別伝曰。玠穎識通達。天韻標令。陳郡謝幼輿。敬以垂父之礼。論者以為。出王眉子、平子、武子之右。世咸謂諸王三子不如衛家一兒。娶樂広女。裴叔道曰。妻父有冰清之姿。墉有壁潤之望。所謂秦晋之匹也。為太子洗馬。永嘉四年南至江夏。与兄別於梁里。潤語曰。在三之義人之所重。今日忠臣致身之運。可不勉乎。至豫章乃卒。(世說新語語類 第2、註引)

② 玠別伝曰。玠少有名理。善易老。自抱羸疾。初不於外擅相酬对。時友歎曰。衛君不言。言必入真。武昌是大將軍王敦。敦与談論。咨嗟不能自己。(同上文學 第4、註引)

③ 玠別伝曰。玠有虚令之秀、清勝之氣。在羣伍之中。有異人之望。祖太保見玠。五歲。曰。此兒神爽聰令与衆大異。恐吾年老不及見爾。(同上前書 第7、註引)

④ 玠別伝曰。玠至武昌見王敦。敦与之談論弥。曰。信宿。敦顧僚属曰。昔王輔嗣吐金声於中朝。此子今復玉振於江表。微言之緒。絶而復統。不悟。永嘉之中。復聞正始之音。阿平若在乎。當復絶倒。(同上書 第8、註引)

⑤ 玠別伝曰。玠少有名理。善通莊老。琅邪王平子高氣不羣。邁世独傲。每聞玠之語。議至理會之間。要妙之際。輒絶倒於坐。前後三聞。為之三倒。時人遂曰。衛君談道。平子三倒。

⑥ 玠別伝曰。永和中劉真長。謝仁祖共商略中朝人。或問。杜弘治

可方衛洗馬不。謝曰。安得比。其間可容數人。（同上書 品藻第九注引）（太平御覽）

⑦ 玠別伝曰。驃騎王濟。玠之舅也。嘗與同遊。語人曰。昨日吾與外生坐。若明珠之在側。朗然未照人。（世說新語容止 第十四注引止）

⑧ 玠別伝曰。玠素抱羸疾（同上）

⑨ 玠別伝曰。玠在羣伍之中。寔有異人之望。齟齬時乘白羊車於洛陽上。咸曰。誰家璧人。於是。家門州党号璧人。（同上書容止第十第四注引太平御覽）

62・63

⑩ 玠別伝曰。玠咸和中故遷於江寧。丞相王公教曰。洗馬明当改葬。此君風流名士。海内民望。可脩三牲之祭。以敦旧好。

（太平御覽 529 世說新語逸事第十七注引）

⑪ 衛玠別伝云。阮千里有令聞。太尉王君見而問曰。老莊與聖教異。阮曰。將無同。太尉善其言。辟之為掾。世号三語掾。王君因嘲之曰。一言可辟。何復於三。阮曰。苟是天下民望。亦無言而辟。何復復於一言也。（北齊書 68 裴文舉傳 19 太平御覽 93 裴文舉傳）

⑫ 衛玠別伝云。玠於武昌見大將軍王敦。與之談論弥日。（北齊書 93 裴文舉傳）

⑬ 衛玠別伝曰。玠字叔宝。陳留阮千里有令聞。当年太尉王君見而問曰。老莊與聖教同異。阮曰。將無同。太尉善其言。而辟之為掾。世号三語掾。君見而嘲之曰。一言可辟。何復於三。阮曰。苟是天下民望。可無言而辟。復何復於一言。（太平御覽 93 裴文舉傳）

の如くである。一般に、この頃の別伝をみるに、例えば世說新語にひく、「阮光祿別伝曰。裕字思曠。陳留尉氏人。祖略齊國內史。父顗汝南太守。裕淹通有理識。累遷侍中。以疾築室會稽剡山。徵金紫光祿大夫。不就。年六十一卒。」（前引）とか、「〔范〕宣別伝曰。宣字子宣。陳留人。漢萊蕪長范丹後也。年十歲能誦詩書。兒童時手傷改容。家人以其年幼。皆異之。徵太學博

士、散騎常侍。一無所就。年五十四卒。」（前引）という如く、

姓名、本貫、祖先、人物評、政治活動、逸話、官職、卒年という如き書法が用いられていたようである。そのことは、世說新語にひく、多くの別伝を一瞥しただけでも明かであろう。勿論、世說新語の注は、世説の本文を理解する為の注釈であるから、別伝に限らず、他の引用書でも、その人物の出自、為人を説明する為のものが多く、従って、その内容が限定されて引用されている場合が多いように思われる。それと同じく、別伝の引用にあたっても、さしあたって本文理解の為の、最少限度の引用しか用いられていないが故に、この阮光祿別伝、范宣別伝の如き書法が用いられているかとも考えられる。勿論前引衛玠別伝をみれば、別伝の内容は常に必ずしもこの二者の如く簡単なものであったとは考えられないとはいえ、矢張り本質的には、この両者の内容と異なるところはなかったとしてもよいのである。

いま、衛玠別伝について、注目すべき点に検討を加えながら、その史料的人格を考えてみよう。

先ず内容についてみるに、これら別伝には、本貫、出自等がないけれども、⑬に「玠字叔宝」とみえるところからみて、姓名、本貫、祖先等があげられていたことは間違いないからう。更に官職については、どのように起家し、どのように累進したかは全く見えず、ただ太子洗馬であったことをいうのみであるが、衛玠は晋書（晋書 36 衛玠傳）のその伝によるも、洗馬以前には、太傅西閣祭酒であったのみであるから、或は省略されたのかも知れない。卒年もこの引用文の限りではみえないが、①で卒し

たことをいい、⑩で卒後の改葬のことをいっているから、卒年も勿論原文にはあったものとせねばなるまい。

以上の如く、衛玠の経歴は極めて不充分にしか明らかにされないのに対して、その人物評や逸話の如きは極めて豊富である。ここにあげた衛玠別伝は、すべてその人物評であり、人物を知る為の逸話であるといっても過言ではない。先にも指摘した如く、別伝には、逸話的な内容の多い場合や、政治的な色彩の濃い場合などがあつたわけであるが、この衛玠の場合は、寧ろ逸話的な内容を多く含む場合であつたといえそうである。

では次に、内容のもつ史料的价值という点から考察してみよう。先づ注目されるのは、この別伝の成立は、少くとも咸和以後のものである。それは⑩の引用文によって明らかであろう。

衛玠が死んだのは、「永嘉六年卒。時年二十七。」(晉書36)とされているが、これは①にみる如く、予章においてであつたであろう。それが咸和中(408-409)に至つて改葬されたことは、晋書(36)にも、「咸和中改瑩於江寧。丞相王導教曰。衛洗馬明当改葬。云々」とあるところで明らかである。

然るに、⑥によれば、永和中に、劉真長(愔)と謝仁祖(尚)とが人物を商略したことが見える。とすれば、この別伝は咸和よりも後の、永和中(385)以降に書かれたものと考えねばならぬ。とすると、彼の死んだ永嘉六年(352)からすれば可なりの年数を経て書かれたものと考えられる。

しかし、この別伝が直接的な資料に基づいて書かれたものであることは疑う余地がないようである。いま、このことについて検討するに、晋書(36)衛瑾伝には、

「浪邪王澄有高名。少所推服。每聞玠言。輒歎息絶倒。故時人為之語曰。衛玠談道。平子絶倒。澄及王玄、王濟竝有盛名。皆出玠下。世云。王家三子不如衛家一兒。玠妻父樂広有海内重名。識者以為。婦公泳清。女壻玉潤。」とみえるが、これを別伝にみれば、⑤及び①に当るであろう。この場合注目されるのは、⑤の別伝では説明が極めて具体的であること、例えば晋書に「議者」としかいわないものが、裴叔道(遐)として明記されている如き、或は晋書では王平子絶倒の理由が記述されていないのに対して、これには明確に理由を示している如きである。更に、別伝の人名は皆その字を以て記されていることで、それに関して、前にもあげた宇都宮氏の言葉をかりて説明すれば、「その(世説新語一筆者注)」文章のスタイルは、決していづれも同じではないが、多くは生のままのことをすぐ文章にしたという感をあたえている。たとえば、人の名など諱はあまり用いず、字または官名などが用いられる。阮步兵、庾公、謝太傅などという現わされる場合が多くて、阮籍、庾璿、謝安などという表現は割合に少ない。すなわち、口うつしの文章の特徴は、こういう点にも、まざまざと現われていると思う。」(「漢代社会経済史研究」所収「世説新語」)という如きが、この場合にもちゃんとあてはまるという。即ち、王澄、王玄、王濟という晋書の表現に対して、ここでは、平子、眉子、武子といわれ、謝鯤という代りに謝幼輿といわれているし、⑥によれば劉愔が劉真長、謝尚が謝仁祖とあり、更に、杜父が杜弘治といわれている。このようにみれば、この別伝が、たとえ永和以後多少の年月を経て書かれたものであるとしても、そこに集められた資料は直接的な資料であつた

といえるであろう。そのことは、⑥の問答において、衛玠が人物評の対象となつてゐることは、彼が尚當時の人々の心の中に生きていたことを示すものであることによつても明らかであろう。

更に、晋書(49)「阮籍瞻の条によるに、「(司徒王)戎問曰。聖人貴名教。老莊明自然。其旨同異。瞻曰。將無同。戎咨嗟良久。即命辟之。時人謂之三語掾。太尉王衍亦重之。」とみえる。これは別伝の、⑪、⑬にあたる記事であるが、別伝には、晋書にみえない内容ものべている。ところが、これと同じ内容の記事が世説新語文学第四にも見えている。これは、「阮宣子(修)有令聞。太尉王夷甫見而問曰。老莊与聖教同異。対曰。將無同。太尉善其言。辟之為掾。世謂三語掾。衛玠嘲之曰。一言可辟。何仮於三。宣子曰。苟是天下人望。亦可無言而辟。復何仮一。遂相与為友。」というものである。この三者を比較するに頗る異った点がある。先ず第一には、太尉王君と司徒王戎と太尉王夷甫という点、次に王氏と対話したのは阮千里(瞻)かそれとも阮宣子(修)かの点、更に、嘲つたのは王君か、君か、衛玠かという点、の如くである。

先ず一番簡単な最後の点からみるに、⑪では「王君因嘲之」としてあるが、これでは意味が通じまい。衛玠とすれば最も意味が通ずるようである。ところで⑬の「君」というのは誰かというに、衛玠別伝の記録中の「君」であるから勿論衛玠のことであろう。すると、別伝も亦元来は衛玠の意味で「君」と書いていたに違いないが、⑪はそれを「王君」と誤つたものと考えねばなるまい。従つてこれは、別伝⑬及び世説文学本文を正しい

とせねばなるまい。

ところが他の二点は仲々厄介であつて、必ずしも明快にとけそうにはない。先ず、上記三記事を比較するに、記事の書き方で一致するのは別伝⑬と世説文学篇がある。即ち質問者が太尉王氏であり、批判者が衛玠である点の外、「老莊与聖教同異」とか、「太尉善其言。」とかいう書法が一致する。然るに晋書では、書法が寧ろ修飾的であつて、内容を率直に表現するという手法ではない。このことからみて、別伝⑬と世説文学篇は同一系統の資料によつたもので、而も前述した如く、別伝が直接的資料に基づいて書かれたとすれば、この両記事は、晋書よりもより原資料に近いものと考えざるを得ない。

このように考えても、これは一般論で、すぐに太尉王君或は王夷甫と司徒王戎の何れが正しいか、阮千里と阮宣子の何れが正しいかの解決には役立ちそうにもない。しかし、別伝⑬と世説文学篇が同一系統の記事であるなら、太尉王君は文学篇の如く、王夷甫のことであろうことは推定される。

さて、晋書(43)王戎伝及び王衍伝をみるに、王戎は司徒、王衍は司空、司徒、太尉となつてゐるし、何れも西晋末の人物であるから、司徒王戎、太尉王衍はありうるわけである。又、晋書(49)阮籍伝によるに、瞻も修も共に西晋末の人物であるから、何れもこの頃辟召をうけうる立場にあつたようである。然るに、晋書(49)瞻の条には前記の如く彼が司徒の掾として起家したとし、修の条には、「修居貧。年四十餘未有室。……王敦時為鴻臚卿。謂修曰。卿常無食。鴻臚丞差有禄。能作不。修曰。亦復可爾耳。遂為之。」とある。これによれば修は鴻臚丞に

起家したと考えられるが、若し阮修の起家の記事が正しいならば、三語掾は修ではなくて、瞻であったということになる。もしそうであったとしても、辟召者は一体王戎であったのか、王夷甫（衍）であったのかの疑問は残るわけである。

そこで、今一度晋書に返るに、司徒王戎が瞻を辟したとした後に、「太尉王衍亦雅重之。」と付け加えている。その上、別伝の「君見而嘲之曰」以下を省略しているわけである。これは実は、仲々慎重な記述の方法ではないかと筆者は考える。

というのは、現行晋書の、此条の原資料の筆者は、恐らく三語掾に関する二通りの説——阮千里と阮宣子の——を知っていたであろう。それと共に、司徒王戎説をとるからには、これにも王戎と王衍説があったにちがいない。そしてその決定にあたっては、別伝乃至は世説文学篇、或はそれ以前の資料をよく読んだに違いないが、その解決に苦しんだ結果、司徒王戎説をとると共に、「君見而嘲之」以下を省略したのではなからうか。いま別伝によってこの話の筋をおってみると「阮千里の言をよしとして王太尉が辟召した。ところが衛玠がこれを嘲った。そこで阮が、『苟是天下民望。可無言而辟。復何仮於一言。』といった」ということになる。この阮というのは、何も考えないで読めば阮千里と取るの外はない。世説文学篇によったとしても、阮宣子が対話して、後に阮宣子が「苟是天下人望云々」というのであるから、同一人とみえること別伝⑬と同様である。しかし、よく考えてみれば、これは甚だ筋の通らない話である。というのは、三語の掾と呼ばれた阮千里を衛玠が嘲ったのはわかるとしても、そうよばれた阮千里自身（文学篇では阮

宣子自身）が、「何仮於一言」といったというのはおかしいので、衛玠に対する反論としては成立しても、自ら及び自らを辟召した人物をも批判する形となるからである。従って、現行晋書の原資料の編者は、このようなややこしい史料を除いて、阮千里を三語掾と決定し、王戎を認めたものであろうが、それでもなお一抹の不安あるままに、「太王衍雅重之」と付け加えたものではなからうか。

これは全くの推定であって、何故阮千里と決定し、王戎を認めたかについての決定的な材料は見出せない。ただ別伝と世説文学篇の記事を筋を通して考えたとすれば、前述の如く阮千里が掾として辟召されたことを認めれば、「苟是天下民望云々」といったのは、勿論阮千里ではなく、他の第三者的人物でなければならぬ。そう考えればそれは恐らく阮宣子であったであろう。その点文学篇が阮宣子をこれにあてたのは筋が通るわけである。但し、文学篇の如く対話した人物も亦阮宣子とすれば筋は通らなくなること前述の如くである。従って阮千里が三語掾に辟され、その批判者として衛玠があり、更に阮宣子があったと考えれば、この話の筋は通ることになる。こう考えると、別伝⑬と世説新法文学篇の記事は同一系統のものであって、恐らく原形は別伝に近いものであったのに、文学篇では、太尉に王夷甫と注し、冒頭の阮千里を阮宣子と誤ったものと考えることができよう。誠に単なる推論にすぎないけれども、若し以上の如く考えることも亦可能であるとすれば、恐らくは現行晋書のこの条に関する記述のもとになった資料の編者は、その慎重な記述にもかかわらず、疑問点を未解決のままに逃避したもの

と考えられ、別伝や世記新語文学篇の記事によってそれを補うことができるといえるであろう。

さて、始めに立返って考えるに、衛玠別伝が以上の如きものだとする、別伝にみる資料は直接的な資料或はそれに近いもので、史料的价值は極めて高いといわねばならぬ。しかしながら、衛玠別伝が逸話的或は人物評的記述に終始しているのは何故であろうか。それは恐らくは、晋書の彼の伝(晋書36 衛玠伝)によっても明かな如く、彼は若くして死に、殆んど政治的経歴はなかったが故であろう。その人物がすぐれていたことは、別伝による晋書の伝えによるも明かであるが、とり立てていふべき政治活動はなかったのであった。

このように少くとも衛玠別伝に関する限り、その史料的价值は極めて高いと思われるが、「不知誰作」(晋書44注 孟嘉別伝)といわれる孟嘉別伝においてはどうかであろうか。いま、最も詳細に孟嘉別伝を引用している世説新語識鑒第七劉注によるに、

(孟) 嘉別伝曰。嘉字萬年。江夏鄢人。曾祖父宗。吳司空。祖父揖晋廬陵太守。宗葬武昌陽新縣。子孫家焉。嘉少以清操知名。太尉庾亮領江州。辟嘉部廬陵從事。下都還。亮引問風俗得失。対曰。待還當問從事史。亮举塵尾掩口而笑。語弟翼曰。孟嘉故是盛德人。軫勸學從事。太傅褚裒有器識。亮正旦大会。哀問亮。聞江州有孟嘉何在。亮曰。在座。卿但自覓。裒歷觀久之。指嘉曰。將無是乎。亮欣然而笑。嘉裒得嘉。奇嘉為裒所得。乃益器之。後為征西溫參軍。九月九日溫遊龍山。參寮畢集。時佐史並著戎服。風吹嘉帽墮落。溫戒左右。勿言。以觀其举止。嘉初不覺。良久如廁。命取還之。令孫盛作文嘲之。成著嘉坐。嘉

答還即。四坐嗟嘆。嘉喜酣暢。愈多不乱。溫問酒有何好而卿嗜之。嘉曰。明公未得酒中趣爾。又問聽伎絲不如竹。竹不如肉何也。答曰。漸近自然。軫從事中郎。遷長史。年五十三卒。とある。

この別伝も亦、姓名、本貫、祖先、人物評、為人を示す逸話、官職、卒年等を揃えた典型的な別伝である。但し、これは長文とはいえ、必ずしも別伝の全文ではない。例えば、太平御覽(265) 従事の条引の嘉別伝によれば、「庾亮辟嘉為勸學從事。亮盛脩敦学。高選儒官。」とあり、北堂書鈔(73) 従事の条引の嘉別伝には、「庾亮拔嘉為勸學從事。高選儒官。嘉值尚德之舉。」等と見え、又、芸文類聚(4) 九月九日の条引の嘉別伝によれば、「嘉為桓溫參軍。既和而正。溫甚重之。九月九日溫遊龍山。……溫謂左右及賓客。勿言。以觀其举止。」等と世説新語所引嘉別伝にない記事が見えるからである。ところで孟嘉には前述した如く、幸いにも陶潜作の「晋故征西大將軍長史孟府君伝」がある。(余舊文二 陶潜の条)これは作者のはっきりした伝であるので、これと比較して孟嘉別伝の内容を考えてみよう。府君伝の全文引用は省略するが、いま別伝と府君伝の相違点をみるに、

一、本貫は、別伝江夏鄢人とあり、府君伝は江夏鄢人という。
二、曾祖父宗は、別伝は吳の司空といい、府君伝は吳の司馬という。

三、宗を葬ったのは、別伝は武昌陽新縣といい、府君伝は新陽縣という。

四、府君伝には、嘉の妻は長沙桓(郡)公陶侃の第十女という

も、別伝なし。

五、府君伝には、同郡郭遜及び郭立の記事あるも別伝なし。

六、府君伝には秀才にあげられたりとするも、別伝なし。

七、卒年は別伝五十三、府君伝五十一。

などが主なものであるう、同じ内容は、

1. 祖父揖廬陵太守たること。

2. 庾亮の勸学従事として応対せしこと。

3. 何南楮哀が孟嘉を見出したこと。

4. 九月九日に関する記事

5. 桓温との酒及聴伎についての問答。

などである。即ち、両者は大体似たような内容の記述を含むが、府君伝の方に別伝にない内容の記述があり、その他多少相違する点が見出される。しかし、同様な内容の記述であっても必ずしも全く同様ではない。例えば九月九日の宴についての府君伝の一部を引用するに、「君色和而正。温甚重之。九月九日温遊龍山。参佐畢集。四弟二甥咸在坐。」とみえて世説新語所引別伝にみえぬ記事がある。勿論、「色和而正。」というのは前引の如く芸文類聚(4)引別伝にもあったが、「四弟二甥咸在坐。」というのはどの別伝にも見出せない記事である。このようにに府君伝は、別伝に全く見えない記述があり、別伝の方は全文が伝わっているとは考えられないといえ、陶潜は恐らく別伝の作者が見なかった資料をもっていたのかも知れない。とはいえ、府君伝が必ずしも正しいといえないことは既に前にも一言したところであるが、更に、呉志(3)孫皓伝によれば「司空孟仁(宗)卒。」とあって、最後に孟宗は司空であった

ことは明かであるが、そこに引く裴注呉録によるも孟宗が司馬となったことはいわぬ。更に、府君伝には、大司馬長沙桓公陶侃第十女とあるがこれは勿論誤りで「贈大司馬、長沙郡公陶侃」(陶潜^{五六})のことであろう。或はこれは全晋文における筆写の誤かも知れないが、陶淵明集(5)中の、「晋故征西大将军长史孟府君伝」にも同様にみえる。以上のように考えてくると、どうも府君伝は正確な資料によったとはいえず、むしろ別伝の方が正しいように思われる。

いま、晋書(98)孟嘉伝をみるに、その内容は、

一、本貫は江夏鄆人、二、曾祖父は司空、三、庾亮との対話、四、楮哀、孟嘉を見出すこと、五、九月九日の記事、六、酒及聴妓のこと、七、卒年五十三、とあるのみで、世説新語所引孟嘉別伝と大同小異であって殆ど異るところはない。ただ、祖父揖、廬陵太守というのが晋書で抜けているだけである。従って、現行晋書がよった資料と、孟嘉別伝のよった資料とは同一系統のものとみてよく、府君伝の資料は、それらの外に違った資料が附加されているものといえそうである。そうすると、別伝や現行晋書の孟嘉伝資料の系統の方が古い資料であって、陶潜はその後の資料によってこれに附加したものというべきであろう。而も府君伝の内容に錯誤の多いことは必ずしもそれが正しいものとはいえないことを示すものであろう。ということとは、このような恐らくは東晋末に書かれたと思われる府君伝―宗書(93)陶潜伝によれば、彼は元嘉四年卒―は、東晋末の人孟嘉の死を去ること遠からざる時代に書かれたにかかわらず、必ずしも別伝より正確であるとはいえないわけであり、逆に別

伝の史料価値を証明するものであろう。

ところで、別伝には、その人の死後遠からざる時期に書かれた別伝と、可なり後になって書かれた別伝とがあると考えてきた。上にみてきたそれぞれの別伝は、直接的資料にもとずいて書かれたと思われる、史料価値の高いものであることを確認したが、それらが何時書かれたかは、必ずしもはっきりしてゐたわけではない。それにも拘らず、それらが直接的資料にもとずいたものとすれば、その人物の死後に作られたことは勿論であるにしても、それほどその死を下ることのない時期、少くとも直接的資料の手に入る時期に作られたものであることは間違いないであらう。

ところが、これに反して袁宏による山濤別伝の如く、可なりの時代をへて作られた別伝、或は曹毗による神女杜蘭香別伝の如く、この世の人でもない者の別伝の場合、どのような内容であらうか。

袁宏の山濤別伝は、寡聞の故か、僅かに太平御覧(909)に見える、「袁宏山濤別伝曰。陳留阮籍譙国嵇康並高才遠識。少有陪其契者。濤初不識。一与相遇。便為神交。」というもののみかと考える^(初學記にも同文の引用あり)。ところで袁宏は、その伝^(曹毗)によれば、「竹林名士伝三卷」をかいているので、竹林の七賢に興味をもっていたことは明かであるから、その一人である山濤の別伝もこの名士伝と共に作られたものと考えられる。すると、同じく七賢の一人である嵇康の別伝も、袁宏の作ではないかとの推察もあり得よう。それはとも角、竹林名士伝を書く為にあつめた資料は、また山濤別伝の資料でもあつたと考えてよからう。

その資料がどのようなものであつたかを明かにすることはできないにしても、ほぼ一世紀をへだてて書かれたこの場合、必ずしも直接的資料がなかったにしても、少くとも袁宏が卒した孝武帝太元初年⁽³⁸²⁾より可なり以前に書かれた資料にもとずいたことは明かであるから、今日から見れば、少くとも当時の資料の内容を伝えたものといえるであらう。

次に曹毗による杜蘭香別伝についてみるに、晋書(92)曹毗伝には、「時桂陽張碩為神女杜蘭香所降。毗因以二篇詩嘲之。并續蘭香歌詩十篇。甚有文彩。」とみえている。従つて、杜蘭香別伝は、その神女の別伝であらうが、太平御覧(909)によると、「曹毗神女杜蘭香伝曰。神女姓杜字蘭香。自云。家在青草湖。風溺。大小尽没。香時年三歳。西王母接而養之於崑崙之山。於今千歳矣。」とあり、この蘭香が降つたのは、晋太康中のことであるという^(太平御覧)。太平御覧にひく曹毗杜蘭香別伝によれば、何れも神仙の記事であつて現実的なものとは思えない。曹毗がどのような考でこれを作つたかは不明であるが、噂にきいた話をもとに作られた一種の伝説的なものであろうか。このような別伝は他にも見えるので、例えば、太平御覧(904)に、魯女生別伝をひいて、「魯女生長樂人。少好學道。初服胡麻。乃求絶穀八十餘年。日更少壯。面如桃花。日行三百里。」とみえる如きである。このようにみれば、別伝の中には、当時の伝説的逸話をもつて、神仙的人物を描いたものもあつたわけであらう。必ずしも史実として受け取れないものも可なりあつたであらう。

若し以上説き来つたというところに大過なしとすれば、一般

に史上にみる人物についての別伝は、これを多くは史料の価値の高いものとして、考えてよいであろう。たとえ、可なり年代をへだてて作られたものもあったとしても、その史料価値は必ずしも正史に比して劣るものではないであろう。勿論、杜蘭香別伝、魯女生別伝の如きは神仙的説話であって、当時は或は事実として考えられていたのかも知れぬが、今日ではそのまま受取り難い記述である。

ところが、第一節において別伝ではあっても時代的に他の別伝とずれがあり、例外的なものとして考えておいた前漢の別伝があるが、これも、実はこの杜蘭香別伝、魯女生別伝に類するものではないかと考えられる。即ち、東方朔については、漢書(65)の東方朔伝の賛によるに、「其事浮淺。行於衆庶。童兒牧豎。莫不眩耀。而後世好事者。因取奇言怪語。附著之朔。故詳録焉。」とあり、その師古の注に、「此伝所以詳録朔之辭語者。為俗人多以奇異妄於朔故耳。欲明伝所不記。皆非其実也。而今之為漢書之學者。猶更取他書雜説。仮合東方朔之事。以博異聞。良可歎矣。」としている。このように、漢書東方朔伝自身が既に巷間の雜説をとり入れ、更に後世の學者が異聞をこれに附会しようとしたとすれば、この別伝も亦その部類の一つでなかったとはいえない。又、劉根別伝の太平御覽(74)に引用するものをみるに、「潁川太守高府君到官。民人疫。郡中掾史。死者過半。夫人、郎君悉得病。從根求消除病氣之術。根曰。於庠事之亥上。穿地取沙三斛。着中以淳酒三升沃其上。府君從之。病者悉得愈。疫氣絶。」とあるのが、劉根は方術の士であり、伝説的要素の多い人物であったといえよう。

更に劉向は、漢書(30)芸文志にみえる如く、武帝の時光禄大夫であって、経伝、諸子、詩賦を校せしめられたほどの學者であった。それにもかかわらず、彼には專伝がない。恐らく後世の學者が、彼の專伝に代るものとしての別伝をつくったものではあるまいか。

次に李陵は有名な李広將軍の孫、彼自身亦武帝の時、將軍として匈奴との戦に従ったが、遂に敗れて匈奴に降り、匈奴にあること二十餘年にして卒した(漢書95)李陵伝(漢書95)といわれる、極めて数奇な運命の持主であった。

以上のようにみてくると、これらの人物はそれぞれ、後世の人がその伝説的説話を伝えるのに都合のよい条件があったようである。別伝の中には、上述の如く説話的な要素の強いものもあったわけであるが若し後世の人が古い時代の人物の別伝を作るとすれば、それに都合のよい人物がえられたであろう。その結果として、前漢時代の上述の如き人々の別伝が作られたのではないかと考えられる。勿論以上の推測は、前漢別伝を例外的なものとする前提のもとでのことであるが、後漢以降特にその後期一の別伝の多いのに比べて、前後代の別伝が極めて少いのは、それらが人物の死後遠からずして、作られた如きものではなくて、別伝作製の風潮が起ってから、後世の人によって作られた特特例的なものだからと考えるのは無理ではないであろう。

さて、話がここまで進んでくると、序言中にふれた左思別伝について一言せねばなるまい。全晋文(240)左思別伝の嚴可均の注によれば、可均は左思別伝を道聽塗説にすぎないとし、現

行晋書がこの別伝を採用しなかったのは一見識であるとしているが、一体それは如何なる事情によるものであろうか。いま、その重要問題点を指摘する為に、晋書(92)左思伝によって、左思が三都賦をつくった時の事情をみるに、「及賦成。時人未之重。思自以。其作不謝班張。恐以人廢言。安定皇甫謐有高誉。思造而示之。謐称善。為其賦序。張載為注魏都。劉逵注吳蜀。而序之曰。……陳留衛瓘又為思賦作略解序曰。……自是之後。盛重於時。文多不載。司空張璠。見而歎曰。班張之流也」とあるが、この点につき左思別伝は、「思造張載問曙蜀事。交接亦疏。皇甫謐西州高士。摯仲治宿儒知名。非思倫匹。劉淵林。衛伯輿並蚤終。皆不為思賦序注也。凡諸注解。皆思自為。欲假時人名姓也。」(世說新語文學第四注引)とみえて、これらの序注解と称するものは、左思の自作にすぎないとする。これに対し、嚴可均は、晋書を以て正しいとし、別伝は単なる道聽塗説にすぎず、「執真是宿儒であろうとも、左思と同じく賈謐の二十四友の一人であるから倫匹にすぎず、衛瓘(確は誤である)劉逵は勿論早く死んだけれど、だからといって注解を作らなかったとはいえず、その証として、皇甫序、劉注は文選注にみえ、衛序は晋書にみえる。而も魏志衛臻伝の注に、衛瓘の序はまあまあだけれど、注の方はただ紙を汚したにすぎぬつまらぬものだと裴松之が評しているが、もし左思自らが注したとすれば、そんなつまらぬ注はつかなかったであろう」(今晋文二卷左思別伝注)としている。この可均の注をみれば、なるほど別伝の説は誤りで、晋書がそれらを採用なかったのは確に一見誠であろう。とはいえ、今までみてきた如く、別伝が一般に史料的价值が高いという考え方からみるに、一概

に左思別伝を道聽塗説として退ぞけるわけにはいかぬ。即ち、これら三都賦の序注の類は、左思の自作にすぎないとの説も、当時一般に流布していたのではなからうか。というのは、左思が三都賦の前に作った齊都賦にも注があることは、例えば、水經注(26)淄水の条や、太平御覽(55)扈の条にひく、「左思齊都賦曰。四扈。〔春秋冬夏四鳥也。〕」とあるものに明かであるが、晋書の左思伝にもこの賦の注のことは全く見えないことからみて、恐らくこれは自注であったであらう。すると、前に齊都賦に注したからには、三都賦も自注ではないかと考えるのは自然であらう。しかも別伝に、「又頗以椒房自矜。齊人不重也。」(世說新語文學第四注引)とあるところによるに、少くとも彼の本貫齊にあつては、左貴嬪(晉書訓左貴嬪參照)の故を以て自ら矜り、その故に齊人の指弾するところであったと思われる。以上の如く考えるならば、この別伝は恐らく左思に好意をもたぬ齊人の作であり、左思の人柄の故に、郷党齊人の間に流布していた説をそのままに表現したのであろうか。とすれば、この別伝も全くとるに足らぬ道聽塗説として退ぞけられるべきではなく、左思の為人を何うに足る貴重な史料であるといわねばならない。

第三節、別伝と家伝

さて、最後に、別伝と家伝の關係をとり上げておきたい。筆者は嘗て門閥社会の成立にあたって、家伝の類が盛に作られたことを指摘し、それら家伝の原材料は別伝ではなかったであろうかとの意見を提出しておいた(「六朝門閥の政治的社会的考察」(長天集第六輯))、いまここで、この考えの正否を検証してみよう。

いま、荀氏について、家伝と別伝とを比較するに、先ず荀彧

の場合について魏志(10)荀彧伝裴注引荀彧伝別に、

(1)彧德行周備。非正道不用心。名重天下。不以為儀表。海内英雄咸宗焉。

(2)鍾繇以為。顔子既没。能備九德。不忒其過。唯荀彧然。或問繇曰。君雅重荀君。比之顔子。自以不及。可得聞乎。曰。夫明君師臣。其次友之。以太祖聰明。每有大事。常先諮之。荀君是則古師友之義也。吾等受命而行。猶或不尽。相去顧不遠邪。

とみえるが、これに対応する荀氏家伝は、太平御覽(55)に、

(1)荀氏家伝曰。荀彧德行周備。名重天下。海内英俊。咸嘉焉。

(2)又曰。鍾繇以為。顔子既没。能備九德。百行不二其過者。唯荀彧乎。或問繇曰。君推荀君。比之顔子。自以不及。其可得聞乎。繇曰。夫明君師臣。其次友之。以太祖聰明。每大事成

先諮。荀彧是則古師友之義也。吾等受命而行。猶或不尽。去固遠耶。」

とみえ、更に文選(59)齊故安陸王碑文引李善注には、

(1)荀氏家伝曰。荀彧德行周備。名重天下。莫不以為儀表。とみえる。

さて、これらを見るに、(1)と(1)'は同一内容にあり、その書法からみて同一系統の記事であること明かである。(1)'及び(1)"によって荀氏家伝の此の条の全文を伺うことができるが、(1)の別伝と比較すれば、「非正道不用心。」が家伝でぬけているのは明かであり、大きな相違点である。更に、家伝では、「海内英俊咸嘉焉。」というが、この表現はここという如き天下の儀表たる人物に対する人々の態度の表現としてはどうもびつたりしないのではないか。それよりも、別伝に、「咸宗焉」という

表現の方が適切な表現であると考えられる。この二点からみるに、別伝の方が彧について、より詳細にして且つ適切な記述をなしているといえよう。従って、家伝はその内容からみて、別伝乃至は別伝と同一系統の資料から作られたものと推定せられ、その編纂の際、省略や記述の変化が行われたと考えられるであろう。

次に(2)及び(2)'についてみるに、内容は殆ど同様であり、記述の上に多少の出入があるにすぎない。従って、これらも亦同一系統の資料によるものであること疑ない。(2)'に「百行」とあるのに、別伝にみえないのは大きな相違であるが、勿論それがあった方が文意ははっきりする。元来別伝には百行はなくて、家伝の編纂の時附加されたものか、或は元来百行があったのに、裴注としての引用の時におちたものか、そのあたりのことは不明である。然るに、最後の、「相去顧不遠邪」(2)"というものと、「去固遠耶」(2)'というものは、明かに何れかが記述を変化させたものである。ところで、この両者は、前段の文意をうけて何れが正しいものであろうか。この条の後半の文意をとってみるに、「太祖の聰明さを以てしても、なおかつ大事あるごとに荀彧に相談している。とすれば荀彧は太祖にとって師友にあたる如き傑れた人物である。我々の如きは命をうけて行くにすぎぬことでも、なお時には不十分なことがある。考えてみれば荀彧と我等との隔りは誠に遠いものではなかるうか」という如きものであろう。従って、最後の相去るといふ言葉は極めて強い表現でなければ文意は通じない。ということは、別伝のような反語的表現の方がより適切、というよりもそうでなくては文

意がすつきりしないといえよう、即ち、家伝のようでは、原資料の真意を伝えていないというべきであろう。

では次に、荀彧の場合についてみるに、魏志(10)荀彧伝所引「何劭為彧伝曰」即ち荀彧別伝によれば、

歳餘亦亡。時年二十九。彧簡貴不能与常人交接。所交皆一時俊傑。至葬夕赴者裁十餘人。皆同時知名士也。哭之感慟路人。

とみえるが、これに相当する荀氏家伝には、太平御覽(400)に、

荀彧簡貴。不能与常人交接。所交者皆一時俊傑。彧卒。至葬夕赴者十餘人。皆同年名士也。哭之感慟路人。」

とみえる。これも亦ほば大同小異ではあるが、別伝には、「彧卒」というものがなく、「裁」(わずかに)の字がある。更に別伝に「同時知名士」というものが、家伝では「同年名士」となっている。これらは恐らく別伝が正しいので、家伝は、御覽

に引用される時省略、変更がなされたのかも知れないが、ここ

にみる限りでは、多少記述を政めたものかと考えられる。別伝

が正しいとするのは、前述した如く、何劭は西晋武帝と同年で

あるから、魏の末年既に司空であった荀顗(荀氏家伝 39)のすぐの弟で

ある彧よりは、多少は若年であったであろうが、殆ど同時代の人物といつてよく、荀彧別伝も、彼自らの見聞に基づいて作られたものと考えられるから、荀伯子撰のこの家伝(荀氏家伝 39)の政治考察(成吉思汗の政治的考察)よりもずっと早く、而も根本的な資料であることは疑い

いからである。もっとも荀氏家伝は荀伯子撰のもののみとは限らず、より古いものもあったかも知れぬが、少くとも彧につ

ての家伝記載は、荀彧別伝より早く書かれたとは考え難い。

従つて、その内容、記述の類似からみて、家伝はこの荀彧別伝を資料として編纂されたと考えてよいであろうが、それは恐らく荀彧の場合についてもいえることであろう。このようにみれば、荀氏家伝は、荀彧別伝、荀彧別伝の如きを資料として編纂されたと推定してさしつかえあるまい。

結 語

いままで、別伝を種々の面から考察してきたが、ここではこれら別伝の意味するところのものについて一言して結語に代えない。既に指摘した如く、別伝は一般的にはその筆者を明かにしない。而もそれらは、一家、一門によつて作られたものではないようである。

ところで、この時代の個人の伝記には、他人による伝記のみならず、自伝も可なり多かったようである。例えば、後漢時代の人物鄭玄の自序(太平御覽 26)馬融の自叙(太平御覽 26)楊雄の自叙(文選 26)魏から西晋にかけての人物杜預の自叙(太平御覽 26)呉における陸喜の自叙(荀氏家伝 39)西晋の人物傅咸の自叙(太平御覽 11)傅暢の自序(太平御覽 26)袁準の自序(魏志 11)趙至自叙(太平御覽 26)、西晋から東晋にかけての人物梅陶の自叙(太平御覽 26)抱朴子自叙(太平御覽 26)等が見える。これらは文字通り、自ら自分の経歴、逸話等を書き記したものであったらしく、例えば一例として傅暢自序をひいてみるに、太平御覽(265)所引のものには、「傅暢自序曰。時請定九品。以余為中正。余以祖考歷代掌州鄉之論。又兄宣年三十五立為州都。令余以少年復為此任。故至於上品。以宿年為先。是以鄉里素滯屈

者。漸得叙也。」と見え、同書(695)には又、「傳暢自序曰。余年五歲。教騎常侍魯叔先。与先公甚友善。每来往。喜与余戲。嘗解余衣褶披其背。脱余金環与侍者。謂余悵惜。而余笑而与之。經數日不索。」ともみえている。尚お、同書(385)の傳暢自叙には、「暢字洪迎。云々」ともいつている。これらをみれば、これらの人々は相当の年輩になった時に、自らの過去をふり返って、政治活動、逸話等を記したものであらう。従って、先にあげた、嵇喜が弟康の伝をつくり、鍾会が母の伝をつくり、顧愷之が父の伝をつくり、管辰が兄輅の伝をつくったというのは、あたかもこの自叙に類するもので、それらの人々が自伝をつくらなかったのを子或は兄弟が補ってやったものと考えることができよう。

ところが、家伝にも、一門による自作があったことは、例えば裴松之による裴氏家記(旧唐書上46)、裴子野による続裴氏家伝(梁書70)、曹毗による曹氏家伝(旧唐書上46)、荀伯子による荀氏家伝(魏書志上46)の如きによって明かである。これに反して、一門にあらざる人々による家の伝記もあったので、傳暢による裴氏家記(魏書志上46)、皇甫謐による韋氏家伝(魏書志上46)の如きは、明かに他家の人物による家伝の作製である。別伝というのは、宛もこの他人による家の伝記に比すべき、他家の人物による個人の伝記で、自叙或は一門、姻戚等による伝記に対したものであるのではあるまいか。別伝という名称が附せられたことも、自叙伝に対するものとして考えられたからではあるまいか。

ところがこのような考に対して、いささか考慮すべきかと思われる記事がある。世説新語文学第四劉注によれば、「(向)

秀別伝曰。秀与嵇康呂安為友。……秀本伝或言。秀遊託數賢。蕭屑卒歲。云々。」とみえるが、ここでは、秀別伝に対して「秀本伝」なるものが引用されている。すると別伝とは本伝に対するものであらうか。では「本伝」とは、一体何を指すものであらうか。これについて考えられるのは、この注の書かれた当時即ち梁代に伝わった晋書、晋紀或はそれら類似の書物に載せられた向秀の伝を指すのではないかということである。ところが、世説新語劉注には、某晋書、或は某晋紀などと称する数多くの史書が引用されている。例えば德行第一の条に引用されたものだけでも、王隱晋書、虞預晋書、朱鳳晋書、徐広晋紀の如くで、その他中興書、晋陽秋、続晋陽秋、晋諸公贊の如きも引用されている。ということは、劉注の書かれた梁代には、多くの某晋書その他の史書が現存していたということになり、而もそれらは、某晋書、某晋紀の如く著者名を冠してよばれていたということである。従って、劉注でこれらの書物を引用する場合は、前述の如く王隱晋書とか、或は鄧粲晋紀(世説新語言語第二所引)劉謙之晋紀(同)などと、すべて名称をあげているのである。ただ世説新語解触第二十の条の注に、「晋書曰」として、どの晋書であるかを明かにしないものがあるが、これは恐らく「某晋書」とすべきところを、その「某」を逸したものであるでう。

このようにみてくると、若し「秀本伝」なるものが某晋書乃至はこれに類する史書に収められるところのものであれば、「某書秀本伝」とあるべきであって、単に上述のように「秀本伝」とのみ記したとは考え難い。すると秀本伝なるものは、秀別伝と同様に、独立した一つの伝記と考えるの外はない。若しそ

う考えねばならぬとすると、それは別伝でないことは明かであるから、自伝或はそれに類する向秀個人の伝記であつたということになる。若しこのように考えうるとすれば、別伝を自叙伝に對立するものとした上述の見解は、この「秀本伝云々」の記事によって否定されることはないといえよう。

さて別伝は、一般的にいつて史料的价值は高いと考えられた。ということとは、別伝の作者が、時代的にその人物に近いということ、それによって根本的な資料が入手し易いことなどの外に、何等かの意味でその人物なり、その一家なりに関心をもつ立場にあつたことを意味するものではあるまいか。例えば、荀彧別伝に太祖の上表文、太祖の荀彧に与うる書等が収載されている如き或は左思別伝の作者が齊人と推測されたこと等の如きはそれを推測せしめるものであらう。そう考えてくれば、荀彧、荀彧等の別伝が荀氏家伝の資料として採用されたことも、極く自然のこととして了解されるのである。

若し以上の如く考えうるとすれば、何故そのような個人の自叙伝、乃至は別伝が盛んに作られたのであらうか。この疑問を解く鍵は、それらが後漢末から東晋にかけての人物についてのものであり、且つ上述したところで推定される如く、太凡その時代に作られたということにあるのではなからうか。即ち、この時代は従来の研究によって明かな如く、中央官僚家の確立、門閥社会の成立、繁榮の時期にあたる（宮崎博士「九品官人法の研究」参照）。そのような社会で、家の伝記、一門の系譜が作製せられたことは、既に筆者の指摘したところであるが（「六朝門閥の政治的社会的考察」（『最大史学』第六卷））、その上魏初九品官人法の成立によって、任官が個人の德行、才能と共に、次

第に家格によって左右されるようになる（「前略」『魏晉中正制の性格について』、益々その家の系譜が重んぜられるようになるのは当然であらう。従つて、官僚家においては、一門内における各個人の閱歴を明かにし、それを他に誇示すると共に、それらを材料として家伝を作製するというのが行われたであらう。その場合の各個人の閱歴が、自叙伝或は別伝であつたと考えられる。勿論、自叙があるから別伝はないというものでないことは、馬融、鄭玄、趙至、抱朴子（葛洪）には自叙があるのに別伝も亦上引表にみる如くあつたことでも明かであり、或は同じく自叙をもつ傳威にしても別伝（北堂書抄）をもっているのである。では、自叙と別伝はどのような關係にあつたかというに、自叙は自らがその閱歴を書き残し、家門の譽を自ら誇示する形のものであるに對し、別伝は何れの如き同時代の文章家でもあり、政治家でもあつた人、或は多少年代をへだてた後世の文筆家たる袁宏、或は同郷の人物たる齊人によって書かれた如く、一応世評を基礎として外部から眺めた人物論であつたとすべきであらう。そのことは、前述衛玠別伝に、劉真長と謝仁祖による人物評の對話がみえていることによつても推察できよう。従つて左思別伝、曹瞞別伝の如き批判の場合もあり、荀彧別伝の如き非常に好意的な場合もありうるわけであらう。ということは、別伝は、その家以外の人々によって書かれたものであり、そのような意味においても、社会的にその權威が認められていたと考えてよいのではあるまいか。

では、何故に別伝の作者は一般的に不明なのであらうか。それについて確定的なことはいいい難いが、或る場合には、初めは

それらも別伝とは呼ばれず、晋書（33）何曾伝勅の条にみる如く、「所撰荀彧、王弼伝及諸奏議、文章並行於世。」とあって、荀彧伝、王弼伝の如く、呼ばれていたものもあったであろう。しかし、それら他人による伝記の外に、自叙形式の伝記もあった筈であり、それら両者を区別する為には他の呼び方を用いる必要があり、その為某々別伝と呼ぶようになったものもあったであろう。このように作者は明かながら敢て作者の名が冠せられなかった場合もあったが、又、曹瞞伝や左思別伝にみる如き、相当思い切った批判がなされている場合も作者の名は明かにされ難いという事情もあったかも知れぬ。

しかし乍ら、より一般的には、別伝そのものの性格、即ち、左思別伝に見た如く、別伝は当時世上に流布していた人物評を基として書かれたという性格―勿論その編纂にあたつては種々の資料をその一家に求めたかも知れないが―によって、それら別伝はある個人の作というよりも、当時の社会の作というべきものであったからではあるまいか。換言すれば、別伝とは門閥社会の、その人物に対する評価であつたと考えられるのである。（了）